



👁️👁️ みどころ

阪本順治監督には『闇の子供たち』『人類資金』『エルネスト』のような他人には真似のできない社会問題提起作がお似合いだが、たまにはオリジナル脚本で“人生いろいろ”も・・・。

女のアラフォーは分岐点だが、男の40歳は働き盛り。しかし、実は男だって人生の折り返し地点では・・・？

この3人の関係は二等辺三角形？それとも正三角形？“新世界”ならぬ“半世界”とは一体ナニ？そんな抽象論(?)と共に、友情と夫婦、親子関係の具体的なあり方についても、本作の設定の中でしっかり考えたい。



■□■本作は社会問題提起作ではなく、人生ドラマ！■□■

古くは『闇の子供たち』(08年)、『シネマ20』153頁)、近時は『人類資金』(13年)、『シネマ32』209頁)や『エルネスト』(17年)、『シネマ41』93頁)で、ものすごい社会問題提起をしてきた阪本順治監督の最新作だから、私は大いに期待！武部好伸氏が書いた2019年2月15日付日経新聞夕刊の「シネマ万華鏡」でも「全てが納得できる。本作は間違いなく阪本監督の代表作と言える。素晴らしい日本映画と出会えた。」と絶賛し、星5つを付けていたから、こりゃ必見！

そう思いかつ意気込んで劇場に向かったが、本作は社会問題提起作ではなく、阪本順治監督のオリジナル脚本に基づく人生ドラマだった。なるほど、なるほど。だから、『半世界』という、わかったようなわからないようなタイトルに。ちなみに、大阪では「新世界」が有名だが、「半世界」とは一体ナニ？本作のタイトルは意味シンドから、しっかり解明しな

くちや。

■□■舞台は？主人公は？3人の関係性は？■□■

本作の舞台は某地方都市。主人公は“不惑”（40歳）を目前にし、人生の折り返し地点にさしかかっている3人の同級生だ。

冒頭、地元で中古車販売業を営んでいる岩井光彦（渋川清彦）と自衛隊を辞め妻子と別れて、ある日突然故郷の今は誰もいない古い家に戻ってきた沖山瑛介（長谷川博己）の2人が山の中に入り、子供の頃に木の下に埋めた“あるもの”を掘り返そうとするシーンが登場する。そして、その思わせぶりのシーンが終わった後、地元で炭焼き職人をしている高村紘（稲垣吾郎）を中心とする3人の男たちの本筋の物語に入っていく。したがって、冒頭のシーンは「ハハ、これは本作ラストで種明かしをするネタだな」ということがわかるが、その“種明かし”に至るまでの物語の道のりは実に長いから、それをじっくり楽しみたい。

また、本作には日本人なら誰でも中学1年生の時に数学で習った、二等辺三角形と正三角形の定義が出てくるが、その違いはナニ？本作における男たちの関係は二等辺三角形ではなく、正三角形であるところがミソだから、その意味をしっかりと確認したい。

■□■三者三様の個性に注目！稲垣の演技力に脱帽！■□■

稲垣吾郎は「SMAP」の中では一番地味な存在だった（？）が、役者としての演技はキムタクこと木村拓哉や草彅剛くんより数段上。私は、稲垣が役所広司と共演した『笑いの大学』（04年）（『シネマ6』249頁）を観てそう思ったが、それを本作で再度確信！

長谷川博己は現在 NHK の朝ドラで放映中の『まんぷく』で主人公の立花萬平に扮してラーメン作りに奮闘中だが、本作では、2人の旧友にさえどこで何があったのかを全く語らず、1日中家の中に閉じこもっている謎めいた男の役を少しオーバー気味に演じている。また、光彦は元々おちゃらけ系の設定だから、渋川清彦はその設定通りの味のある演技をしている。このように、本作では稲垣吾郎、長谷川博己、渋川清彦という3人の俳優が演じる39歳になった男たちの三者三様の個性をじっくり味わいたい。

3人の同級生の関係を、中学校の時から二等辺三角形？それとも正三角形？というわかったようなわからないような“定義づけ”をしていたのは岩井だが、彼の説では正三角形であることに意味があった。しかし、本作を観ていると、私にはどうしても正三角形ではなく、二等辺三角形に見えてしまう。それはストーリー構成上、紘だけは妻・初乃（池脇千鶴）との関係や長男・明（杉田雷麟）との関係が描かれるから、どうしても紘の存在感が強くなるためだが、それ以外に、よくぞここまで難しい炭焼き職人になり切ったな、と感心するほど見事な稲垣吾郎の職人ぶりがある。とにかく、3人の男たちの中核となる稲垣吾郎の演技はすばらしい一言だ。

また、本作は3人の同級生が織り成すドラマがメインだが、同時に紘と長男・明との父子関係、紘と妻・初乃との夫婦関係もじっくり見せる物語になっている。そして、稲垣吾郎の父親としての演技も、夫としての演技も相当なものだから、それにも注目！

■男のアラフォーは働き盛り！しかし、この3人は？■

1974年に大阪弁護士会に登録した私は、最初の10年間は公害問題に取り組んだが、1984年以降は大阪駅前再開発問題研究会への参加をきっかけとして、都市問題がライフワークになった。もちろん、そう言えるのはずっと後になってからで、当時はとにかく夢中で自分の熱中できることに取り組んでいた。

女性にとっての“アラフォー”は結婚や子づくりの点でまさに人生の分岐点だが、サラリーマンでも弁護士でも、男の場合の“アラフォー”は働き盛りで仕事に没頭している時期のはず。私は本作の3人の男たちとほぼ同じ38歳の時には、1987年9月27日付朝日新聞の“ひと”の欄で別紙のように取り上げてもらえるほど都市再開発の分野の仕事に没頭していた。しかし、本作では阪本順治監督は「40歳目前、諦めるには早すぎて、焦るには遅すぎる。大人の友情と、壊れかけの家族と、向き合えずにいる仕事。」という人生ドラマを3人の男たちを軸として描く中で、「愛」と「驚き」が、ぎゅっと詰まった映画を作ろうとしたらしい。

後にはわかることだが、瑛介が心に秘めている2人の親友にも明かせない苦しみは、自衛隊員として海外で勤務していた時に部下を死なせてしまい、それが自分の責任だと思い込んでいること。そんな瑛介は、こんな田舎にずっとこもっている紘も光彦も世界を半分しか知らず、広い世界を知っているのは自分だけだと思い込んでいる（自負している）ようだが、さてその当否は・・・？もっとも、こんな地方都市で中古車販売の仕事を続けている光彦に先が見えないのは当然だし、紘のような炭焼き職人の仕事も二代目の紘でおしまい、息子の明がそれを継ぐはずがないのはわかりきったことだ。そのように考えると、たしかにこの3人は三者三様に「40歳目前、諦めるには早すぎて、焦るには遅すぎる」のかもしれない。本作中盤では、そんな三者三様の「諦めるには早すぎて、焦るには遅すぎる」人生模様が阪本順治監督らしい視点で次々とスクリーン上に登場するので、それに注目！本作を契機として、改めて「男にとっての“アラフォー”とは？」を考えてみるのも一興だ。

■織田信長の時代でも“人間50年”なのに・・・■

本作中盤は何の仕事もせず、家の中に引きこもっている瑛介を社会に連れ出すため、紘が炭焼きの仕事を手伝わせる展開になるが、私の目にはこれは少し不自然。いくら自衛隊あがり体力があるといっても、炭焼き職人という特殊な仕事を素人に手伝わせるのは如何なもの……。材料になる切った木を束ねたり、トラックに積んだり等の雑用ならま

だしも、真っ赤に燃えた炭を取り出す作業を瑛介にやらせているシーンを見ると、思わず危ない！ヤバイ！と思ってしまう。もちろん、これはアラフォー3人組みの1つの助け合い風景だが、私には少し“もたれ気味感”も・・・。

他方、紘は光彦から「おまえ、明に関心をもってないだろ。それがあいつにもバレてんだよ」と鋭く指摘された通り、反抗期の息子・明との関係に悩んでいたが、解決策はなし。毎日のように執拗に明をいじめている連中が家に遊びに(?)来ていても、紘は「いい奴らじゃないか」とほざくノーマンぶりだから、妻の初乃もお手上げだ。そうかといって、紘は息子と真正面から向き合い真剣に父子ケンカをするほどの気力もなさそうだ。そこに突然介入(?)してきたのが瑛介。自衛隊あがり警察あがりやヤクザあがりと同じようなもの(?)で、格闘技はお手のものだが、細身の瑛介もメチャ強いらしい。ケンカにはケンカを！暴力には暴力を！そんな教育の是非はともかく、瑛介が明に教えるケンカ殺法は実践的なものだから、こりゃいざという時は役立ちそう。もっとも、下手にそんな新技を繰り出すと、かえってヤバイことになる危険もあるが・・・。

スクリーンを見ながら私はそんなことを考えていたが、ある日突然“ある事態”が訪れるので、それに注目！紘の炭焼き職人の仕事は一人で切り盛りしていたから、昼食は初乃の手作り弁当を食べるのが日課。瑛介が手伝っていた時は男同士2人で一緒に食べる楽しい時間だったが、せいかく故郷に戻ってきた瑛介がある日再び家から出て行ってしまおうと、紘の仕事も再び孤独なものになっていた。そんな孤独な職場で、心筋梗塞のような症状で紘が倒れ込むと、周りに誰もいなければ・・・。

織田信長の時代では“人間50年”が常識だったが、今や男の平均年齢は80歳を超えている。そんな時代に40歳にも満たない39歳で、紘が突然この世からいなくなってしまうなんて・・・。

■□■人生は人それぞれ。残された者の生き方は？■□■

池脇千鶴の演技は、達者を超えて超一流。したがって、初乃の紘に対する接し方を見ると、一見、紘と初乃の夫婦関係は悪そうだが、実は・・・？また、紘と明の父子関係が最悪なのと同じように、初乃と明の母子関係も最悪のようだが、こちら実は・・・？ことほど左様に、紘は職人として仕事一筋に生きるだけの単純な男だが、初乃の方は家族関係でのしたたかさはもちろん、営業の面でも相当なしたたかさを発揮しているので、それにも注目！

そんな初乃でも、さすがに突然夫がいなくなると、「私も一緒に棺桶の中に入れて！」と泣き叫んでいたが、そりゃ仕方なし。また、瑛介の指導よろしきを得た(?)明は、最近塾に通い始めていたから、それには紘もビックリしていたが、あれほど父親に反発していた明にとっても、父親の突然の訃報は大ショック。しかし、母と息子だけが残された現状に照らせば、明が「男の子の俺が！」と考えたとしても不思議はない。さあ、本作ラスト

で明はどんな人生のスタートを・・・？

他方、正三角形の一边が欠ければ三角形が成り立たないのは当然だが、本作ラストには冒頭に思わせぶりに登場していたシーンが再登場し、子供の頃に木の下に埋めた“あるもの”の正体が明らかにされるので、それに注目！紘の突然の死は、もちろん瑛介、光彦にとっても大ショックだが、大人には大人の世界がある。また、たまたま瑛介には家族はないものの、光彦には当然家族もある。さらに、寿命は人それぞれだし、人生もまた人それぞれ。したがって、残された瑛介と光彦も、“全世界”に生きているのか“半世界”に生きているのかはともかく、これからの人生があるのは当然だ。本作のチラシには「人生の半分を生き、どこへ折り返していくのか？」の文字が躍っているが、まさにこれは瑛介と光彦のテーマだ。

この2人に比べれば、今年1月に70歳になった私は既に人生の3/4～4/5を生きているから、私にとっては残りの1/4～1/5をどう生きていくかがテーマになる。本作の鑑賞を契機として私もそれを再度しっかり考えたい。

2019（平成31）年2月21日記